校長室の窓から

ご流派は？

――「いけばな男子トライアル」の巻 ――

３０代半ばころから教室に花を飾り始めました。担任がない今は、校長室に庭の花木を生けています。

ごく稀に、「習っておられますか。」とか「ご流派は？」などと聞かれることもあるのですが、「一度も習ったことはないんです。」とお答えしていました。

でも、母は池坊を、姉は小原流をそれぞれたしなんでいたので、生け花は幼いころから身近で、自分もいつかは習いたいと思いつつ、永く我流を通してきました。

さて、還暦まであと数年となったこの度、ネットで「いけばな男子トライアル」という、何とも軽いノリのレッスンを見つけ、ついその気になり、ノリに任せて習うことにしました。しかし、「いけばな男子」というのが少し恥ずかしかったので、妻に、

「『いけばな男子』じゃない。『いけばな爺さん、トライアル。』だ。」って言ったら、

「いや、いけばな爺の、とんだ冷や水。」とのこと。

（・・・うまいこと言う。）

ともかくも、「トライアル」という言葉に惹かれて「とんだ冷や水」と相成（あいな）りました。

― そして それから２カ月 ―

「いけばな爺」は、トライアルコースを無事修了。しかし、師匠の話題の豊富さと奥深さに惹かれ、その後もなんとなく通っていて、のんびりゆったりとお茶を啜りながら、いけばなを習うというよりは、お茶飲み友達との日向ぼっこのような、気の抜けた“お稽古もどき”をだらだらと続けておりました。

そんなある日。なにげなく、いけばな教室の講師プロフィールを見ていて「うわっ」と驚きました。何と！ 私の師匠は、流派の最高職位にある人らしい。道を究めたそんな人と、お茶飲み友達のように日向ぼっこしながら、だらだらと花を生けていた・・・いやはや、まさに汗顔の至り。

少しうろたえた私は妻に、

「どうしよう。師匠は最高位だって。」と言うと、

「何で始める前に調べんかなあ。お茶飲み友達じゃないし。」と呆れられ。さらに、

「無知というのは恐れを知らん。」との追い打ち。

（・・・確かに。）

とはいえ、今さらどうもこうもできないし、せっかくの出会いだし・・・ということで、そこは恐れを知らない無知の強み、

『せっかくだからちゃんと教わろう。』と、覚悟を決めて稽古に通うことにしました。”日向ぼっこ”は一転、真剣勝負に。

心を定めて臨んだ稽古の日、なぜか師匠の言動もピリリと引き締まっていて、稽古の終わりには、

「久村さん。これから一年間、基本をやりましょう。」というお言葉。

私はただ「はは～っ。」と平伏（はしませんでしたが、そんな気持ち）。さらに、

「一年たったら、入門かどうか決めましょう。」

って・・・つまり・・・いけばな爺のトライアルは何と一年延長されることと相成（あいな）りました。

さて、爺のトライアル一年延長の沙汰（さた）を妻に報告したところ、

「あなたは一体どこへ行こうとしてるの？ 行き先がわからんわ。」と笑われ、

「僕もわからんわ。」と一緒に笑いましたが、本当は、ただ、この先生との出会いを無駄にしたくなかった。この人から学べる機会を大切にすべきだって思った。それだけのことなんだと思います。

というわけで、「ご流派は？」という問いへのお答えは、

「いまだ流派を名乗るお許しは、師匠から得ておりませぬ。（なんせ、爺はまだトライアル中ゆえ。）」と、なぜか文語調でお答えすることにしております。